

基督教婦人矯風会と性教育

——久布白落実らの大正・昭和前期の活動を中心にして

小田切 明 徳

目次

- 一 「海外醜業婦・恥論」
- 二 一貫して追求した廃娼運動
- 三 矢島・久布白路線
- 四 性教育の登場前後
- 五 産児調節運動と無縁の矯風会
- 六 一九二〇年代の矯風会の性教育
- 七 久布白の性教育論
- 八 オールズの性教育
- 九 矯風会の性教育論の功罪

キーワード

基督教婦人矯風会、「婦人新報」、久布白落実、オールズ、山本宣治、性教育、純潔教育批判

この小論は主として明治期から昭和初期までの『婦人新報』に掲載された性教育に関する論文を検討の対象にしています。同志社大学人文科学研究所「女性キリスト者」研究班における二回の報告をまとめたものです。このきっかけはこの研究会に遅れて参加した私はテーマ設定に思案をしていましたが、その際、田中真人教授から『婦人新報』の昭和一〇年台の性教育に関する論文の検討を薦められました。この研究会参加の動機として、戦後日本の純潔教育の源流に大きな影響を与えた基督教婦人矯風会（以下、矯風会と略す）の言動を知りたかったためにたいへん嬉しいアドバイスでした。田中教授と研究会参加諸氏からの報告や田代美江子や早川紀代らの論文⁽¹⁾によって矯風会の諸活動や性に関する取り組みの概要を知ることが出来ました。先ずは諸氏にお礼申し上げます。私の専攻は山本宣治（以下、山宣と略す）の性教育論⁽³⁾の究明ですが、その途上で以下に述べますように矯風会の活動から新たな視点を与えられました。

一九三〇年代以降、山宣刺殺により彼の性教育上の思想や実践内容はかき消されたかに思われましたが、安田徳太郎、太田典礼（武夫）⁽⁴⁾らの性調査、性学研究によって生き続けました。彼ら以外にも性教育への言及⁽⁵⁾は星野鐵男らの業績は読んでいましたが、中国大陸への侵略戦争が激化した昭和一〇年代の性教育論は私の関心外でした。私は、性教育実践は人権擁護の立場が不可欠と考え、環境破壊・ジェノサイドの最大の人権侵害である戦争と性教育は両立しないと思っていました。当初「婦人基督教婦人矯風会の性教育論」の題字を掲げましたが、私の対象にしたのは『婦人新報』の創刊号（一八九五年二月）から一九四四年四月号の五五三号までで、久布白落実を中心に取り上げたものであり、『東京婦人矯風会雑誌』、『婦人矯風雑誌』及び戦後『婦人新報』と会の活動⁽⁶⁾の分析は対象外です。

一 「海外醜業婦・恥論」

Woman's Herald の英文名と梅に鶯の絵を表紙に掲げた『婦人新報』創刊号は一八九五（明治、以下Mと略、M二八）年二月二八日に出了ました。この号には「日本の汚辱」と題する「海外醜業婦のことに候」とするシンガポールや香港等での日本人娼婦の現状を嘆き、「日本婦人全体、否、全国民の名譽を損するに至り候」、「日本にある諸兄が、婦人矯風会として、ピュリチーンサイチー（社会の清潔を保存せんと務ル会）を組織せられんことを深く希望致し候」とあります。創刊号に取り上げられたこの路線は、石坂正信の「醜業婦に關し、下等社会を矯正する事」の必要を説く年会記念講演の収録演説「矯風事業に対する私見」（一八九八年三月号の第三号、以下『婦人新報』の引用には三、98・3と記す）、「布哇に於ける我邦の醜業婦人」（四、98・4）等と、ほぼ数十年の『婦人新報』の「定番記事」となり、日本の婦人矯風会の活動の特徴となりました。

万国基督教矯風会、とりわけ日本に多大な影響を与えたアメリカのその運動は名称の通りに禁酒（temperance）運動がその中心でしたが、日本の基督教婦人矯風会はこの純潔路線に力点を置いて歩む事になり、ほぼ毎号に娼娼問題、畜妾・一夫一婦制、「売淫婦」・「醜業婦」等の用語が並び、その弊害を無くすための主張が繰り返されました。

矯風会の会則二条には、「本会は主として禁酒禁煙の事業を拡張し、社会風俗、道德、教育、衛生、伝道、その他一般の弊害を矯め、社会全体の幸福を増進することを」目的に決しました。そのために、1組織課、2教育課（禁酒教育中心）、3風俗課（慈愛館設立を目指す）、4法律課、5衛生課、6文書課と六つの組織を置きました（前掲の三号、矢島楯子報告）。そして、「一番重大なもの、禁酒禁煙の運動、次は一夫一婦制の主張」でした（六十、02・3、潮田千勢子）。禁酒、娼娼の主張ばかりでなく、「動物虐待防止」（六二、02・6）、「工女問題」（六五、02・9）、「鉞毒被

害地巡回報告（七〇、03・2）、軍人課中心の「慰問袋を送る運動」（八四、03・4）の社会問題にも熱心に取り組みとともに、「理想の食卓」（六三、02・7）の家事や「家庭看護法」衛生の紹介、「婦人の自覚とその活動」（六四、02・8）等の女性の地位向上のための啓発記事も盛んに取り上げ、出發時には全方位の構えを持っていました。

私が論ずるのは性教育に関連するテーマですが、この用語は明治期にはありませんので、廃娼と純潔の課題にも言及します。「海外の醜業婦」については、「戦勝国たる我國民の品格を地に落とすもの」（二二、98・2）、「如何にせば畜妾の風を杜絶すべき國民の品格、貞潔なき國民」（一七、99・9）と言った記事に見られるように性産業従事者を「醜」、「淫」の文字を使い、それに従事するものを高みから蔑み憐れむ存在として描いています。一九〇一年、「醜業婦救済目的」にした慈愛館の開設をしますが、矢島楯子によれば慈愛館では「墮落した婦人」の救済のための設備として位置付けられていました（四五、01・1の矢島演説）。

二 一貫して追求した廃娼運動

日本の矯風会の廃娼運動と言えば、この論文とのかかわりで言えば久布白落実が多感な少女期を送った群馬のキリスト者の運動を無視するわけにはいきません⁷⁾。その推進者の一人の島田三郎らは『婦人新報』にしばしば登場して、明治期の政治家（松方、桂や伊藤ら）の不品行（九五、04・3、一〇〇、04・8）へ鋭い追及を行っています。日本社会における「畜妾、遊郭遊びは男の甲斐性」と言う風潮はなかなか根強いものでした。遊郭での政治論議や商談がまかり通っていた状況下では、キリスト教の教義である一夫一婦制の主張はそう簡単に日本社会には受容されませんでした。矯風会としては大火や地震による遊郭（大阪新地は四九、09・10。吉原遊郭は一六六、11・4）の焼失に際し

て、移転、廃止に向けての粘り強い取り組みを積み重ねていきました（一四九、09・10、島田や山室軍平）。

これらの主張の特徴は被害女性への「醜業・淫売」のレッテル貼りによる蔑視にありました。『婦人新報』の初期の論者の多くは男性の寄稿から始まった事情によりますが、やがて女性の執筆が多くなっても、その論調の「醜業恥論」の延長とみなす事が出来ます。「国の汚辱」（六三、02・7）では、長野市城山の大廈高樓を見た「皇太子が、アレは何じゃ」と御下問ありしが、県知事一同奉答能はざりし」のコラムが載っていましたが、知事らの困惑する顔が目に見え、浮かびそうです。

他方、明治三〇年代の『中央公論』でも遊郭移転、廃娼問題および学生の風紀取り締まりが取り上げられ、「寄宿舎を設け学生をここに收容してこれを監督する」事で放縦な学生生活を抑えようとしたのです。板垣退助は「風俗改良の必要な所以」（〇二年一月号）を載せ、安部磯雄（〇三年一月）、海老名弾正、下田歌子ら数名が書いた後に社論「男女の性欲を論ずる」（〇六年九月号）と数年間このテーマでの執筆が続きました。明治期の後半、文学界において流行ったキリスト教的恋愛観（純潔、恋愛、結婚の三位一体⁽⁸⁾）の浸透と並行して家庭や学校において「悪習の抑制」の役割を担ったと言えます。大正期に及ぶこの喧伝の中心が羽太鋭治、澤田順次郎⁽⁹⁾です。明治期には性教育の概念はなく、あったのは若者の「性の逸脱」や花柳病（性感染症）への対応としての性欲教育、情欲教育⁽¹⁰⁾であり、この「情欲教育」によって「廓通い」や「手淫・自瀆」を押さえ込もうとしたのです。つまり禁欲・脅迫主義の主張でした。この根っこには欧米のキリスト教社会の思想である「生殖の性」しか認めない躰教育の請売りがありました。例えば自慰をさせないようにと、ポケットの無いズボンの用意や就寝の際には手を縛る等々の親への注意事項が載っていました。

三 矢島・久布白路線

日本の矯風会のリーダーであったこの二人の思想・行動が日本型矯風会運動に決定的影響を与えました。久布白落実はサンフランシスコの震災後（一九〇六年）に「日本女性売春窟調査」に立ち会い、「身を切るような苦しさ」を覚え彼女らの救済を心に決め、彼女の自伝を『廢娼ひとすじ』⁽¹⁾と名付けたように彼女のライフワークとなり、廢娼の追求が生涯を貫く課題となりました。その後、大叔母である矢島樺子に同行して第七回万国矯風会ポストン大会に参加しました。

守屋東やガントレット恒子らも矯風会の純潔路線を肯定し、時々の『婦人新報』でこれに関する論文を書きました。一九一六（大正五）年二月号に久布白は、「立て戦闘は将来にあり」と題して、「我等の敵は誰」として、「芸娼妓を要する社会で、彼等なくしては日常の交際もよくせぬ男子です。子女に芸娼妓を強ふる文盲なる父兄です。更に進んで、我が日本帝国の道德觀念です。可憐なる奴隷の解放を、教育を、救済を、」と書きました。『婦人新報』へのこれらの投稿に着目した守屋東の強い要請によつてこの年四月から久布白は矯風会の幹事に就任します。その後の『婦人新報』では大概、矢島会頭の巻頭言の次に彼女の論説が続き、幹事となった彼女は雑誌編集に大きな影響を持ちました。矯風会の前年大会で「大正一〇年を期して公娼全廢の法令を獲得せんとの大理想を掲げ」た経緯があり、彼女は四国時代に構想していた五錢袋運動を提唱して廢娼運動の先頭にたちました。翌一九一七年からは、廢娼運動の記事の中には「男女の貞操」（二三四、17・1）が登場し、このテーマの講演会や論文が掲載されます。大阪飛田遊郭設置反対運動の中で教育運動として五錢袋・募金運動と、直接的な反対運動とその両面を推し進めました。「貞操問題に就いて小学校職員に訴える」（二三七、17・4）として、「人の生まれる事、（を）、純潔な学理的な考へを以つて児童

の理解する範囲に真実を以って丁寧¹に教ふる処があれば児童は満足して、人類の高きに至る」、「この問題は今や欧米諸国に於いて新しい研究の一つ」だと教育の重要性に着目します。同号では、安井哲子（女子高等師範教授）の「児童の教育と純潔の心」があり、林歌子も「教育上より飛田遊郭設置に反対する」と題して、「小中学校時代より、男女貞操の観念を明瞭に教え導く他にはありませんまい」と書きました。こうした学校教育への注文は既に『中央公論』（一九〇三年六月号）でも見られ、「学校で生理学を教えるのに、全然生殖機能の説明を省い居るのはよろしくない」と生理学からの説明を求める意見がありました²が、これは少数者の声で明治～大正初期には男の性欲を如何に抑えるかが、性欲教育の中心でした。大正中頃になると、『婦人新報』には、与謝野晶子（二一九、15・10）や平塚雷鳥（二四一、17・8）の「新しい女」の論文が紙面に散見されます。同誌の懸賞論文の「貞操論」二等の西本論文（二五二、18・7）では、性欲教育について男女混合教育の主張があり、懸賞論文の別のテーマ「公娼全廃論」の一等の同志社大生の福原論文では、松浦志太郎京大教授の「性欲は抑圧するも害なし」を引いて公娼の全廃の主張が載りました。このように久布白らは廢娼運動に全力を挙げて取り組みましたが、その主張はキリスト教の教義に基づく一夫一婦制の思想から来るものであり、貞操問題を中心とした啓発活動でした。

四 性教育の登場前後

さて、『婦人新報』の「婦人の権利と公娼制度」（二六八、19・11）において、「男子の性欲の濫用を是認する国民思想」の中に、「男子に対する性の教育（次の下線とも引用者）は絶無」という用語が登場します。他方、冒頭に「性は生なり。生は天なり」で書き出される雑誌「性」（一九二〇年、主幹は医師の澤田順次郎）の1号で、澤田は「性教育

の趨勢」の論文を書き、ドイツのニュールンベルグでの学校衛生会議に出席した文部大臣代理講演したキルヒネルの「中学校上級者には、性的教育を説く必要がある」の紹介¹²をしますが、これは富士川游に次ぐ本格的な紹介でした。澤田はここでは性的教育として、「少年男女に健全なる性的智識を授けて、性欲の危害を自覚せしむる」事を目的に「当代教育界の代表者一五〇名」(六一名が回答)にアンケート調査を行っています(回答者の中には同志社女学校校長中瀬古六郎も含まれていました)。

ところで、この『性』の二号には、矯風会・矢鳥についての論評が載っています。「娼娼運動を高唱する老女矢鳥樺子女史を総師として、議事に請願するさうである。、、矢鳥女史等は意気込は大したもので此刑法改正案を掲げて、原首相以下、大臣、貴衆両院の各幹事を片っ端から手別けして歴訪し、この恐ろしい大運動、」と。「生きんが為の醜業である」と題する『萬朝報』の矯風会批判を「矯風会は、海外醜業婦の本場たる九州の島原、天草の実情を調査、報告会を、開いた。、、国辱だ、と大声疾呼しても駄目だ。、労働問題の解決である」とあります。この『性』の一卷で澤田は「性的教育」とか、多くは「性欲教育」を使いましたが、当時の医師の関心事が性欲にあり、彼らは「それを如何に取り扱うのか」と若者を善導しようとした事がわかります。

山宣が同志社大学予科生(経済、政治学の専攻生)を対象に「人生生物学」と題する性教育を始めたのは一九二〇年(九月)からです。彼は東京帝国大学卒のイモリの生殖細胞の研究していた新鋭の動物学者でした。山宣は明治・大正初期の情欲教育を「性的隠蔽主義、経験至上主義、剛毅派の禁欲主義」と批判して、「予の提唱する性教育の要は、個人に該問題の人間の方面を示し、彼及彼の最愛の者の身辺に襲い掛かる不足の危険を未然に防ぐに足る科学的智識を与え、盲目的本能を制する理性の自律可能性の範囲を示し、以って自知自敬自制を養い、凡人として自に顧みて偽無く生を楽しむ、更に進んでは同胞に奉仕し得る余力を養うを旨となす」性教育もって対抗しました。男子学生の最

も関心のある性を大胆に語る山宣の講義は学生の要求に沿うものであり、その内容は『山本宣治全集』（第一巻）で見られます。彼は半年後にこの講義を受けた最初の受験生四〇名へのガリ版刷アンケートをまとめて、『人生生物学入門・性教育私見』を発表し、学内外の有識者に送り、これにも性教育の必要有無を問うアンケートを実施しました。回答は八五通で、①必要八六％、②有害二人、③不必要・放任四人、④NA・八人の結果となり、徳富蘆花、吉野作造、丘浅次郎らの賛同、哲学者の土田杏村らの反対、高島素之（資本論訳者）は「放任」でした。山宣は『大阪朝日新聞』に「性教育の問題——食事同様に取り扱いたい」（同年六月一九日）を、雑誌では大隈重信主宰の『大観』に三回の連載を載せ、広く啓発活動を開始しました。

この動きは東北にも伝わり、『週刊婦女新聞』（同年五月第五日曜日）の「宮城高女の性教育」では読者から編集部へ送付してきた『河北新報』の切り抜きを紹介し、「女子教育界多年の宿案であった性欲教育も自然科学の内容の一部として、実行をしている」と、校長小倉教授の談話が載ったが、「その筋から反対的注意は相当あったらしいけれど、これを断行、生徒の方では真面目に学習している」。この記事は性欲教育となつていますが、読者の新聞社への手紙では、「本日到着の婦女新聞にて京都同志社山本氏の性教育に関する意見を紹介下され、面白く拝見、私もその必要を感じては居りますけれど、記者様が説の通り、教授される先生が容易に得がたからう」との反応がありました。⁽¹³⁾このように用語として「性教育」は直ぐには定着しませんでした。一二年には識者やジャーナリズムでは「性教育」は広く認知されました。私は科学的で人権擁護の視点に立ち実践的裏付けのあるものを性教育と定義しますから、前述の二〇年九月から始まった山宣の同志社大学予科の「人生生物学」講義を日本最初の性教育としています。⁽¹⁴⁾

五 産児調節運動と無縁の矯風会

この時期に女性の関心が高かった産児調節（BCと省略）に関するキリスト教婦人矯風会の言説は、『婦人新報』では皆無です。久布白落実らの矯風会のリーダーは日本のBC運動の指導者であった安部磯雄や石本シヅエらとは廃娼運動や婦人参政権獲得期成同盟会（婦選同盟）運動で行動を共にした間柄でした。アメリカのBC運動の指導者であるサンガー女史の来日は『改造』を始めとして華々しく報道されました。前述の『婦女新聞』では、サンガーの主張を紹介した後で、「受胎制限の可否」をアンケート調査し、回答は一九二二年三月三日号にまとめられています。そこには廃娼や貞操とともにBCにも言及している安部磯雄は「賛成。貧民救済の第一義と信ずるからであり」、子沢山の与謝野晶子は「私は十年來の主張者」と述べましたが、『婦人新報』は一言も論評していません。正確に言えば、加藤ひさが「我国の人口問題に関する一考察」（三四六、27・1）でマルサス主義に触れましたがBCは何も書かず、この沈黙が矯風会としての意思表示でした。

婦人参政権獲得のために久布白らは積極的に他の婦人団体との連携を組みましたが、同時代の「新しい女」であった与謝野晶子や平塚雷鳥とは、ことBCに関する議論では距離を置いていました。石本シヅエとは彼女がアメリカ留学から戻った後の一九二四年一二月、普選同盟の財政部の責任者となった久布白落実は同盟の最高幹部として石本と頻繁に交流していましたが、このBC運動の高揚期にもこうした話題は交流されなかったのだろうか。久布白落実と石本シヅエとは依拠階層が似ていますが、久布白はキリスト教教義である「生殖の性」のみを正当と考えていたのでしょうか。

六 一九二〇年代の矯風会の性教育

「大正一〇年までに公娼全廃」のスローガンを掲げた久布白らの方針は部内の盛り上がりにはならず目標倒れとなりました。久布白はおりから開催されていた万国矯風会第一〇回大会で世界平和のスローガンが掲げられますと、「平和のスローガン」を唱え、普選運動の高まりを受けて女性参政権運動にも力を注ぎます。勿論、彼女は廢娼運動を忘れずにこの年から『婦人新報』の巻頭に「禁酒、純潔、平和」の三目標を掲げました（二八四、21・4）。さて、久布白は「性に対する思想の変遷」（二九二、22・1）の中でE・カーペンターの「性欲は恥ずるものに非ず」を引いて、「本能としての性欲は食欲と同じ、偏見を去って適當なる知識を与える事」が「未完成なる男子」に必要なと説き、第一一回万国矯風会大会出席で訪米した際の「性問題研究館の訪問記」（三二〇、23・8）で、「もつとも困難な問題に対して、健全な解決を与える方法を研究して欲しい」と述べています。こうして廢娼、貞操の実践の追及を人間の性そのものから学ぶ姿勢を強めました。ガントレット恒子は「性教育は絶対必要だ」（三一八、24・6）と一〇項目の身近な躰項目を提起しました。

この頃山宣は、京大で性学の学際的研究会である性学読者会を組織し、調査研究としては「人生生物学資料（アンケート調査）」をまとめた論文「若い男の性生活」執筆や主幹雑誌『産児調節評論』・『性と社会』編集・発行等の啓発活動に力を注ぎました。ところが一九二四年の鳥取の講演会での官憲からの弾圧が原因で京大講師を首にされ、二年あとは京都学連事件を理由にして同志社大学講師も辞めさせられました。この山宣の性教育・BC運動関連のニュースは矯風会のリーダーたちにとっても無関心ではなかったと思われませんが、『婦人新報』は無言でした。彼女らは普選選挙による国政選挙を迎えるに当たって、「特に無産政党の蜂起しつつある今日、教会がこの新興民族の友として国民

たる新しい自覚」が必要だとして安部や賀川豊彦らの無産党にエールを送りました(二五八、28・1)が、山宣にはノーマコメントでした。その後、「母の座談会、夏休みの性教育」(三七五、29・7)が特集され、オールズの性教育の紹介がありました。

七 久布白の性教育論

一九三六年、この年矯風会は創立五十周年を迎えましたが、久布白は『婦人新報』に「純潔日本の建設」と題する十二回連載をします。これは前年、廃娼連盟が国民純潔同盟と改称され純潔運動の新展開を図る必要に迫られたためです。すなわち公娼制度廃止が実現すればその後予想される私娼の増加に伴う性病対策をどうするかの問題がでてきます。そこで久布白はアメリカの軍隊内の性病撲滅対策を参考にして日本の運動にヒントを得ようと、ニューヨークの社会衛生協会やワシントンのクリステンソン慈愛館等に実地研修の旅に出かけました。ガントレットは一九三五年の久布白が外遊中の一〇月号に純潔運動の「歴史やまとめ」を載せましたが、男子の貞操観としての無責任さの追及、男女共学の必要さおよび男女とも自知、自重、自制を説き、「公娼制度の廃止が当局によって断行される日の一日も早からん事を」と書きました。久布白落実のこの連載のタイトルを掲げます。

1月号 緒言 三十五年の研究発表 2月号 私娼黙認から絶娼に進んだ米國

3月号 性病に関わる概論 4月号 性病に関する態度

5月号 ドイツ、スウェーデンの法律 6月号 性病に関する各国の施設

7月号 家庭病としての性病と之に対する法 8月号 我国に必要な諸施設

9月号 性教育に於いて確定せられし十五点 10月号 半世紀に亘る性教育の発達
11月号 米国に於ける婦人保護事業 12月号 米国に於ける少年保護事業

この執筆の目的は「純潔日本の建設」なる題の下に、法律、性病、性教育、婦女の保護救済」を書いたもので、「純潔日本の基礎工事」ともいふべき性教育に関して「これを如何に樹立普及させるか」でした。

(二) ビゲロウの性教育論の紹介

久布白の性教育論は三回（一九〇六年ボストン、一九二二年フィラデルフィア、一九三五年）のアメリカ行きによって影響をうけていますが、三度目がもつとも大きなものでした。その中心がアメリカの三十年間にわたる性教育の実践を総括したビゲロウの性教育論⁽¹⁵⁾であり、この日本翻訳は日本の性教育に関係する人々が関心を持っていました。この一〇月号はその概要——ビゲロウの主張とアメリカの性教育史——を知る貴重な報告です。

1 名称、社会衛生教育、2 性教育の目的は「一般人の経験すべき性に其基礎をおく人生経験に対して、予め用意せしむる為の教育である」。3 性教育の任務、イ、個人の性生活、性衛生に関する明らかなる指導、ロ、この明らかなる智識が個人の健康と能率に関係する、ハ、この個人の健全なる智識と健康な人種に及ぼす影響、ニ、この個人生活が家庭の成立に及ぼす影響、ホ、性生活と性病との関係 4 社会衛生（性）教育の諸問題。これはA（イ）性の科学的健全な取り扱い、個人の生活に及ぼす影響、（ロ）健全にして幸福な結婚と父母の特権、B 性生活の誤れる態度より起こる悪影響、（イ）個人の非衛生、（ロ）私生児、（ハ）自堕落、（ニ）性的不道德、（ホ）性的悪徳、（ヘ）結婚の失敗。（ト）優生学の悪父母、（チ）性病 5 性生活と自制、6 行動の訓練、7 性教育の時期、8 家庭に於ける性教育の責任、9 学校に於ける性教育、10 学課としての準備の方法、11 性倫理の教育、12 文学と理

想、13 健全なる性生活、14 社会衛生教育の効果、15 性教育も絶えず進歩すべきものなり。

(二) アメリカの第一次世界大戦後の性教育 (一月号)

この号では、「半世紀に亘る性教育の発達」を振り返ると欧米での新しい研究が盛になり、この分野では「科学・医学も入る余地な」く「沈黙と秘密が唯一」の暗中模索の状況だが、スタンレー・ホールやビゲロウや英国のM・ストー(16)プスらの「よき若者の出現」があると紹介した後で、「我国でも山本宣治の如き、同志社大学教授時代、私費を投じて研究を重ね、二冊までも著作を出している篤志家もある」とし、同号にはさらに、「よき教科書、著者の出現」としてアメリカを中心に四十数冊の性教育の本の紹介、一九一四年に創立された社会衛生教育協会の活動や一九二〇年、二〇二大学参加をえた年五十回の研修会による、教師の養成の様子等が紹介されました。

(三) 一九三七年の「我国に於ける性教育」の連載

久布白は前年の連載で欧米の性教育事情を紹介の後に、幼年期(一月号)から少年期、青春期、結婚期を経て大人までの各期の性教育の具体的内容を取り上げています。山宣の性教育は青年男子(大学生)対象でしたが、彼女のものにはアメリカ事情を学んでの小学校からの実践の指針を具体化したものでした。後半の執筆は「国民各層の性の問題」を取り上げました。彼女の自伝によると、「自分流の性教育、よみもの的なもの」として以下述べるオールズに学んだ性教育論を展開しました。以下は各月号の主な内容です。

一月号は幼年期(三歳から六歳)を取り上げ、その教育内容の提示があり、六月号までは同じスタイルの記載方法(A知的教育、B情操意志教育の二つの観点からの)、具体的な展開があります。例えば、一月号のAは、花のお話し、

魚や鳥のお話し、赤ちゃんは何処からくるか、Bで、おむつのあて方、下着の着せ方、習慣の付け方等（自瀆の習慣が付かぬように注意すること）のコメント）です。二月号の少年期（七歳～一二歳）、Aでは生物学実地研究、アミューバの話、野鳥の生活、Bでは身体の清潔、言葉の注意、身体の鍛錬、睡眠、食事、交遊、読書、注意事項。三月号の青春期（前・一三歳から一六歳中学時代）、A女子、男子の生殖器官の生理と衛生、月経の原理、内分泌の原理、生物学の水準を取り込んだ内容。B、「女の子一人の問題でなく種族を続けるという国家的大事業」を受け持ち、「かうした大事なお道具をお願いしているんだから」と。四月号の青春期（後・一八～九歳から二五歳、高等、大学時代）、A異性との交際における常識、処女童貞生活の研究、結婚の予備知識、B行儀、作法、倫理、道徳の涵養、新紳士・淑女道の確立。五月号の結婚期（二五歳から三〇歳前後）。六月号の四〇歳前後。七～二月は「国民種々層の性の問題」、七月号は「陸海軍人と性」、八月号は「学校青年と性の問題」、九月は「工場青年と性」、一〇月は「農村青年と性」、十一月は「商業青年と性」、十二月は「工場、農村女性」と各階層に置ける問題を扱っています。性教育と題していますが性病対策が中心で、九月号以降は「健康、純潔問題」の解説です。ここでは七、八月を具体的にみておきます。

七月号、英米日の三国の軍人への性病対策の紹介、英国は一八六四年に一六港に性病予防のために遊郭を設置したところ、女性の参政権の無い時代でしたが設置反対運動によって一八八二年に撤廃決議をさせましたが、病気は減りませんでした、国をあげての公娼、私娼廃絶の運動を五十年間続けた結果、一九一七年には性病の非強制・無料診断により性病は減った教訓の紹介があります。米国では罹患兵は無給、退職者恩給なしですが、法律での取り締まりと性道徳・衛生の教育と娯楽の提供および徹底した医療の提供があったとの紹介でした。八月号は大学生の童貞率の紹介があり、山宣と安田の調査は「我国で此方面に於いて成された最初のもの」で、同大では五〇%と、や安田の「婦人公論」一三年八月号の五五%の数字を見て、「思ったより多いので考えを改めたい」とし、日本の性教育の遅れ

について「文部省がこの問題について研究委員を挙げ、何等か一つの系統ある教育材料をととのえ、其の講師の養成をせらるる必要がある」と訴えました。

(四) 他の性教育関連の記事と小冊子広告

(ア) 時田鶴子「性教育——ジャーナリズムの責任」(三六年八月号)。

(イ) 七月一五日東京日々新聞の太田武夫「益々必要となる子どもの『性教育』」を読んで「オールズ先生の扱い方はあくまで神聖なもの、太田氏も同じく子どもの生まれる自然の作用まで説明する必要はない」、「成長するまで待て」と。「困るのは農村や都会の下層級の人々は他に娯楽が得難いので性を、唯一の娯楽として冒瀆している」。「新聞は『お定事件』、『女人王国めぐり』など余りにも無遠慮だ」と怒る。

(ウ) 一〇月号座談会「若人に訊く」では、「性教育の是非」の声が上がる。そこで矯風会は純潔運動を若者に浸透させるための手立てとして黎明会を早稲田大や専修大の学生を中心に組織し、この年の六月に矯風会本部で「若人に訊く」と題する座談会の内容をまとめ、「男女共学の是非」、「男女交際に対する私見」、「性教育の是非」、「結婚の仕方」の小見出しで紹介しています。性教育に焦点を当ててみますと、「正常に性教育を教えるなんて殆どない」、教えられるが「先生の方でとてもへんな態度で教えるので嫌だった」とほぼ否定的、「ボーイスカウトでは、一四、五歳から一七、八歳で」よく教えられた例もあったようだ。「優生学の見地から先ず花柳病予防法を教え、恐怖心をいだかせるといふのでなく、知らせる必要がある。徴兵検査前までの最も誘惑されやすい年頃の青年たちには特に」、「どこまでも科学的に説明しなければ駄目だ」と指摘する、この後の二人は本部の発言だと思われる。

(エ) 小冊子の広告、『婦人新報』には啓発書の広告がときおり載っています。三六年七月号(三七年は一〇月号)

の裏表紙見返しの一頁分に禁酒や婦人参政権等の冊子と並んで、純潔・性教育関連の冊子の多くが載っていました。⁽¹⁷⁾
 小池四郎訳、B・C・グリーンバーク著『両親と性教育』(三五銭)、G・D・オールズ著は、『家庭と性教育』(二五銭)、
 『性教育指導要領』(一〇銭)、『生命のめばえ』(一五銭)、『母と娘のために』、メリー・デンネット著『性の理解』(以下、定価省略)、岡忍著『若き友へ』、鈴木楽吉著『性教育の問題』、星野鐵男著『性教育の実際』、A・H・グレー著
 『男・女・神』等。これから分るように矯風問題はかなり重要なテーマでした。

(オ) 一九四〇年八月号、「性教育文庫について(オールズ夫人記念)」の文献の紹介

ここでも「山宣の業績に言及」があります。この時代に山宣著『恋愛革命』は持っているだけで検束された本でした。「婦人新報」誌上での度重なる山宣の紹介は、久布白やオールズらはその文献の内容と重要性を理解していたからでしょう。

(カ) 医師ら講演の紹介。三八年六月号(「性及び性病予防教育に就いて」)、十一月号(「性問題、片々」)では、慶応大医学部教授北川正惇が医師の立場からの抑制的コメントです。前者は「性病の恐ろしさ」を小さい時から「なげなく教えるのがいい」、「性衝動の強さ」「男は性衝動に弱い」から抑制せよ、転換せよとし、「自瀆は有害と言うほどの事はない」と。後者は臨床での患者からの聞いた話の紹介でした。一九四〇年一、二月号では、式場隆三郎「性教育に対する指針(上、下)、同年二月号、飯田英作(いずれも医師)の論文があり、四〇年の九月号、一〇月号の医師・志村房雄は「性病コントロール(上、下)」の中で、アメリカの例を引きながら「高等学校で性教育をやっているが、難しい」から、「とりたててやる必要はない」と。

八 オールズの性教育論（『正しい性教育』）

冒頭、この書には「日本基督教婦人矯風会・国民純潔同盟の推薦の辞」が掲げられています。G・D・オールズは新島襄とともに同志社を創立したデビスの次女です。彼女は神戸に生まれ、アメリカのオベリン大で学び、夫とともに再び来日し、日本各地での伝道をし、日本基督教矯風会の教育部長となりました。そこで健康日本純潔日本の建設を目指して、四九六頁のこの大著⁽¹⁸⁾を執筆しました。「自序」の引用文献としてガロウエー、エクスマー、ビゲロウなど先達の紹介とともに、日本人では山本宣治、星野鐵男、岡忍、太田武夫らを挙げています。

本書の内容、第一部、性教育の必要とその訓練、第1章性教育の必要、第2章性教育に関する教師の訓練。第二部、児童の性教育（第3章嬰兒期、第4章幼児期、第5章小学校時代、第6章少年期）第三部、（この章は全体の1/3の分量）、青春時代（第7章原理と問題、第8章性と衛生、第9章飲料、第10章性的逆用（1自慰、2同性愛、3変態性欲、4乱婚、5青年と性病）、第11章自制力の獲得、12章青年男女の交際、第13章如何にして正当な職業を見出すべきか、第14章人生を建設すべき宗教。第四部、結婚（第15章青年の理解すべき問題、第16章配偶者の選択、第17章婚約時代、第18章幸福円満な結婚生活に必要な条件、第19章中年以後）第五部、性と社会（第20章性に対する標準と態度、第21章社会の戦うべき諸悪、（第22章社会改善の実際的方法）、語解、引用参考書、図解、哺乳類の胎児の発生期の様子、胎児の発生図、出産直前の胎児の図、卵割の模式図、子宮内二卵生双生児の発生、産婦人科における壮丁花柳病成績表。

『婦人新報』の三七年六月号に純潔部長島津トシは挨拶の後に「性教育方面は四月帰朝されましたオールズ先生がその招きに応じて全国を巡回されることになっていきます」と紹介し、三九年五月号には「オールズ夫人を悼む」が載り

ました。

九 矯風会の性教育論の功罪

戦中の基督教婦人矯風会・「婦人新報」の戦争協力姿勢については既に早川紀代らが述べた批判的見解があり、私はこれに同感します。「大東亜共栄」の戦争を支持し、天皇・皇后を奉り、皇室賛美の紙面づくりを進め、御下暢金に歓喜する事は「会」と「婦人新報」の当初からの方針で、この誌面づくりをしない限り、性教育も語ることは出来ませんでした。が、ガントレットは『七十七年の思ひ出』⁽¹⁹⁾の中で「一言も戦争反対の声を上げなかった、神にお詫びするばかり」と戦争下の自己の行為をに深い反省を書いています。久布白落実もこれに同感しています。

さて久布白落実やガントレットらの基督教婦人矯風会の多くのリーダーがこの性教育のテーマを多面的に論じている事に驚きました。その内容は欧米の文献や情報の紹介、それまでの国内実践の評価、医師からの助言、若い矯風会の支持者の意見表明等多岐にわたる積極的な論文や推薦図書や冊子の広告を出して性教育の啓発活動を継続した事は意義ある活動でした。中でも久布白落実とオールズの啓発活動は高い水準のもので、それはアメリカのビッグロウやイギリスのストープスのものと比較して遜色ありませんので、「会」と「婦人新報」の性教育について私は一定の評価をします。女性誌の特徴である料理、服装等の家事一般の情報誌・啓発の記事の一つとして、家庭生活での日々を切り盛りする視点があり、戦中でも子育てに必要な性教育の情報を誌面に掲載するのは自然な事といえます。性教育を必要とする第一の理由は、日本に限らず性病と売買春対策でした。その「恐ろしさや汚さ」を強調して、彼らを隔離・差別することで予防しようとしたのです。十九世紀末、病理学者のクラフト・エビングは性病（今日は性感染症と言

う)患者中心の資料分析・研究によって、「性的精神病質」⁽²⁰⁾を表わし、「異常性欲」を定義しました。これにより明治期には前述のようにこれらは文明思想としてキリスト教とセットで日本に移入され、矯風会の純潔重視の方針を支えたのでした。

矯風会の依拠する女性層は、山宣が依拠した階層や『夜這いの性愛論』⁽²¹⁾赤松啓介の庶民の世界とは無縁な「上流層」でした。それゆえ矯風会は支持基盤である『婦人新報』読者層の上流階級への眼差しを終始持っていました。それは一般の知識階級と同様に優生学に取り込まれる弱点をもち、産児調節運動を進めたら兵士は不足すると考えていました。「婦人新報」の論調である性のダブルスタンダード(純潔における二重規範)への批判は弱く、男女共学への言及や「婦人新報」(三五四、27・9)「男の貞操、純潔」の主張があつたものの女性のみ純潔を求める路線に収斂してました。

日本の戦後学校教育における性教育の方向性が決まったのは、一九四七年文部省社会教育局長通達「純潔教育の実施について」でした。この政策決定での久布白落実やガントレット恒、千本木道子、村岡花子らのキリスト教矯風会メンバーの影響は絶大でした。⁽²²⁾私も習った覚えのある植物の花の構造である雄蕊や雌蕊、受粉の役割やカエルの受精の仕方が載った教科書による理科の生殖の授業の骨格は、実はオールズ、久布白らの基督教婦人矯風会のメンバーが戦中に先鞭した性教育教材でした。会の実践の功と言え、偽動物的扱いの傾向が抜けきれない弱点をもちましたが、ここにあげたような性教材の科学的扱いが学校教育に入った事です。他方の罪の方とは言え「生殖のみの性」しか認めない思想とその具体化であり、人権としてのセクシュアリティが抑圧され、純潔路線が日本の性教育の骨格となり今日に及んでいる事です。これはキリスト教の持つ「原罪」とも言うべき教義から来る理念であり、基督教婦人矯風会の責任ではなく欧米を含めた歴史的な重大課題であり、別途に論ぜられるものです。

今日、性教育は世界的な逆風に見舞われています。九五年北京世界女性会議で提起されたリプロダクティブ・ヘルス・ライツの精神は、ローマ新教皇の「中絶反対」、アメリカのネオコンの主導するNO・SEX路線とが相俟って、例えば同性愛者への差別助長やHIV予防のコンドーム教育にストップがかけられたり、国内的には国会や都議会で性教育叩きが強まって、山宣が名指しで攻撃の材料にされている事を久布白落実はなんとコメントするでしょうか。⁽²⁵⁾まさに性と政とはコインの裏表と表現される実態が良く分る状況です。久布白は自伝の終章で「性の問題は永遠」としましたが、性タブーの克服の課題はまさに始まったばかりで、質の高い性教育の実践は発展途上のテーマと言えます。⁽²⁶⁾

註

(0) 性教育はかつてSex educationと呼ばれたが、アメリカのSIECUS（一九六四年創設の米国性情報性教育評議会）のカーケンダールが「Sexは両脚の間にあり、Sexualityは両耳の間にある」の定義が出てから、性教育はSexuality Educationと言う。文部省は「純潔教育」を掲げて「生徒指導」の枠内での扱いに終始してきたが、それは大正期に山本宣治（山宣）が「情欲教育でなくて性教育」と唱えた事を想起させる。なお、山宣は、sexualityの用語を「現代の両性問題」（山宣全集一卷）で既に使っていた。用語のコメントを2つ。性欲の用語は齋藤光（京都精華大）の「大正期日本の『性雑誌』（二〇〇三年）」によると、森鷗外（林太郎）の文筆活動に初発があるようで、彼もまたクラフト・エビングの著作に影響された。性欲（イメージとしては異常性欲が研究対象であった）、情欲の用語から出発し、今日のセクシュアリティーにたどり着くまでに一世紀以上必要とした。その2、性病（venereal disease）は花柳病と訳されたが、欧米でもVenus起源とするが、まさにジェンダー・バイアスの最たるものと言える。最近では性感染病（STD）、または性感染症（STI）と言われる。眼病、皮膚病と同じイメージで対応できるのは何時のことか。

(1) 田代美江子「アジア・太平洋戦争期における娼娼運動と性教育——日本キリスト教婦人矯風会を中心に——」、「教育とジェンダー」（女子栄養大学教育学研究室・一九九八）。

(2) 富坂キリスト教センター編「女性キリスト者と戦争」(行路社、二〇〇二年)。早川紀代論文では、矯風会の戦争協力と対外認識を検証しているが、廃娼運動を始めとする同会のセクシュアリティー全般について言及している。ここでは性教育に焦点を当てることにする。

(3) これまで「山本宣治全集」(汐文社、一九七九年)、一巻(人学生物学・性科学)、二巻(性教育)、の解説、あゆみ出版『性と生の教育』(二二号、一九九九年、「これからの性教育と山宣性学の遺産」)。

(4) 安田徳太郎『性科学の基礎知識』(一九五〇、世界評論社)、太田典礼『性科学』(一九三一、三笠書房) 太田は「日本における性科学とその将来」で、「山本宣治、安田徳太郎の健康な性知識の大衆化、性の啓蒙は初歩的で生物学的すぎた悩みはあるが、最も光って居た」と評価した。山宣が性教育を始めた頃、三高の学生であった太田は後に彼の影響を受けて太田リングの開発に力を入れることになったと述懐していた。

(5) 星野鐵男『性教育に就いて』(一九二七年)と『性教育の実際』(三二年)(日本基督教教育同盟会)の2冊を合本し、一九八一年日本学校保健研究所から復刻版が出ているが、この解題で石川弘義が「日本の性研究」と星野鐵男先生」を記し、明治、大正期の性教育の歩みを概説している。私はこれに学んでこの論考を進めた。

(6) ドメス出版『日本キリスト婦人矯風会百年史』(一九八六年)、久布白落実著『娼娼ひとすじ』(一九七三年、中央公論社)の二冊は引用した箇所が多数に及び、一つ一つを記録しなかった。

(7) 萩原俊彦著、『近代日本のキリスト者研究』(耕文社、二〇〇〇年)

(8) 川村邦光著『セクシュアリティの近代』(講談社、一九九九年)。キリスト教の教義では純潔(マリアの処女性)と出産がもとで、性愛と結婚が関連つけられるのは十八世紀頃からのようである(J・フランドール著『性の歴史』、一九九二年、藤原書店)。なお、セクシュアリティの類書の中で、私はカミール・パリアア著『セックス、アート、アメリカンカルチャー』(一九九五年、河出書房新社)で、ジェンダーについては、ジェフリー・ウィークス著『セクシュアリティ』(一九九六年、河出書房新社)からはゲイ・スタディーについて示唆を受けた。

(9) 羽太鋭治『性愛研究と初夜』、澤田順次郎『性的本能享楽の真相』らの通俗書。

(10) 渋谷知美『学生風紀問題報道にみる青少年のセクシュアリティの問題化』、教育社会学研究六五集。なお、富士川游は一九〇七年に「色情の教育」、「性欲教育」の用語を使っているが、この原語・ドイツ語は、Sexualpädagogik(富士川著作集九巻)で、今日そのまま訳せば性教育となるが、彼は「性欲」や「情欲」を使った。イワン・ブロッホの造語のSexualwissenschaft(性科学)の定義よって性教育の基礎も作られた。

- (11) 久布白落実著『廢娼ひとすじ』（一九七三年、中央公論社）
- (12) 澤田順次郎編著『性』（天下堂書房、一九二〇年）
- (13) 「週刊婦女新聞」五月第五日曜日号（一九二二年五月二十九日）
- (14) 小学館「現代性科学・教育事典」では、山宣の実践を最初のものと紹介している。
- (15) Bigelow, Sex Education. 山宣は自著の「人生生物学」の「文献解題」でこの書を推薦している。イギリスのエリス、ブロッホ、ストープスらもこのビゲロウの書を推薦している。
- (16) マリー・ストープス著（藤井健二訳）『性教育』（家庭研究会、一九三三）。ストープスは来日して北海道で植物化石を発見した生物学者であり、イギリスでのBC運動のリーダーとしてエリスらと共に性の啓発活動に当たった。本書の内容はそれまで社会が扱ってきた「穢れた性」を払拭し、科学的態度と心理の追求が大切だとして、男女共学を説き、嬰兒、幼年、就学、思春期等の各期の指導事項と付録につけられた「The Human Body: 「生殖の意義」、「性的器官」、「人間の誕生」（読み物教材）」等の科学的扱いを具体的にしめした。当時としては高い水準の性教育指南書といえる。ただ、自瀆（自慰）や知的障害児、学校内で担任や校長の役割等の扱いでは時代的制約を感じる。
- (17) 『婦人新報』の小冊子の広告の内容が知りたくて、基督教婦人矯風会・京都支部で編集した「百年史」編者や坂本清音先生の紹介で京都支部の方に実物が保存されているかをお聞きしたが不明。
- (18) ジー、デー、オールズ著『正しい性教育』（教文館、一九三九年）オールズや久布白落実（『婦人新報』三十七年一月号、二月号）の子どものための「性の語り」は以下のような内容である。『婦人新報』（一九二二年一月号の宮川静枝）での、「最初の疑問」と題した家庭の性教育に関するモデルとなる創作をあげておきます。——七歳の鐘一君の「パパ、パパはどこから僕をつれてきたの。さうしてなぜ僕はパパの子供になったの」という素朴な質問への応対である。隣の敏ちゃん「森から拾われた」と言う、パパは困って「ママに伺ってごらん」とふる。父の少年時代は「不純な友達からこの種のゴモンを晴らし持った不幸の子だった」、ママは日ごろから、子供のに寝る前にお話しをしている文学愛好者、そこで「天国の御門に行つて可愛い坊ちゃんやお嬢さんを神様からくださった」と。純潔教育はキリスト教者だけでなく、例えば、市川源三（東京の公立高等女学校校長）らも『婦人公論』に書き、自ら実践していたと言う。
- (19) ガントレット恒著『七十七年の思ひ出』（植村書店、一九四九年）
- (20) クラフト・エビング著『変態性欲心理』（大日本文明協会、一九一三年）を私は読んだが、多くの翻訳・出版がされた。
- (21) 赤松啓介『夜這いの性愛論』（明石書店、一九九四年）、この書で昭和の初めまでムラやマチでの庶民の夜這いの風俗を紹介

しているが、これらは基督教婦人矯風会の女性たちが蔑視した風俗であろう。註8で紹介した『性の歴史』によるとフランスの中世の農村でもこのような風俗がよく見られたようである。

(22) 田代美江子、「戦後改革期における『純潔教育』」（『教育とジェンダー』四号、二〇〇〇年）はその社会教育純潔教育委員会の構成メンバーの3/40、「純潔教育審議会」のメンバー3/17がキリスト教婦人矯風会のリーダーの占める割合であったの報告がある。

(23) 山本直英著『セクシュアル・ライツ』（明石書店、一九九七年）、山本はこの書で、セクシュアル・ライツを「人類最後の人権」と呼んだ。

(24) 浅井春夫他著『ジェンダーフリー・性教育バッシング』（大月書店、二〇〇三年）

(25) 週刊「金曜日」（五六七号）に紹介されている「自民党『過激な性教育・ジェンダーフリー教育を考えるシンポジウム』抄録」における古賀俊昭東京都議の発言。

(26) 学校の教育現場での具体的な性教育実践からの実感であり、私はこれについては既には多数の報告を出している（かもがわ出版『性はおおらかに』一九八九年、『性をしなやかに』一九九二年等）ので具体的な論及はここではしない。